

「自由を見つめて」

ドイツ兵捕虜が描いた風景画

「Paul Kawachi 氏」

コレクション（第2次）

第一次世界大戦中の大正3年（1914）、久留米にドイツ兵捕虜の収容所が置かれました。こうした歴史に興味をもった Paul Kawachi 氏は、かつての軍都久留米に関する資料を収集しています。令和3年度には、昭和20年（1945）に米国陸軍地図局が作成した久留米の地図が、第2次となる今回は、同局作成の佐賀の地図と、久留米俘虜収容所内でドイツ兵捕虜が描いた風景画5枚が寄贈されました。

当時の捕虜たちは、収容所においても娯楽やスポーツ活動を楽しむこと



寄贈された風景画5枚
3枚は日焼けした跡があり、日常的に飾られていたとみられる

ができました。風景画は、どれも大正5～8年（1916～19）の作で、水彩画と鉛筆画があります。収容所の敷地内から見た民家や、収容所が使用していたと思われる畑、敷地内の一角を描いています。画面からは、季節感やその場の穏やかな雰囲気伝わってきます。

このうち、大正5年に制作されたものは、画面右下に「Kriegsgefangenenlager Kurume」（久留米俘虜収容所）、「Blick in die Freiheit」（大意：自由を見つめて、自由への眺望）という表記があります。久留米の捕虜には、普段の生活に大きな行動制限は設けられていないものの、この表記からは、異国の地に長期滞在せざるを得なかった作者が帰国を望む心境がうかがえます。



大正5年作の風景画
「Kriegsgefangenenlager Kurume」、「Blick in die Freiheit」の表記が見える

「権藤家資料」

久留米藩の情勢を今に伝える

「権藤家資料」

権藤家は永禄年間（1558～1570）に、大友宗麟によって竹野郡に封ぜられた権藤隼人正藤原永常を祖とし、江戸時代には下古賀村（現田主丸町）、菅村（現うきは市吉井町）の庄屋職を務めました。

平成7年度に同家より、久留米藩政や郡方関連・諸家系譜といった旧庄屋の文書など、総数124点の寄託を受けていましたが、令和5年度に寄贈となりました。

その一つである「巡見上使案内庄屋手鑑」（左下写真）は、権藤家7代永静が延享3年（1746）の幕府巡見について記録したものです。

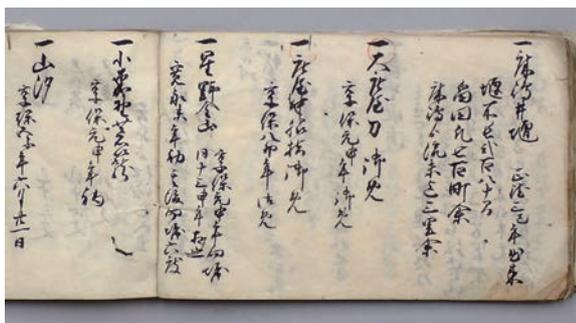


権藤家資料の一部

巡見使の名（徳永平兵衛・夏目藤右衛門・小笠原内匠）や、吉井町から各町村までの距離、村々での出来事が詳しく記されています。

江戸幕府は將軍の代替わりの際、全国各地へ巡見使を派遣し、各藩の政治情勢や領民の暮らしぶりを視察しました。その巡見使を迎える準備と応接に当たったのが庄屋など村役人でした。

左の写真からは、筑後川から取水した床嶋井堰が正徳3年（1713）にできたこと、山汐（土石流）が享保5年（1720）6月21日に発生したことが分かります。



「巡見上使案内庄屋手鑑」
1カ条目に床嶋井堰について、6カ条目に山汐についての記述がある